

2016年度第1四半期決算説明会  
主な質疑応答

Q1: エプソンを取り巻くマクロ環境は不透明感が増していると考えますが、第2四半期以降の取り組みについての考え方を教えて欲しい。

A1: 今年度から始まったEpson 25第1期中期経営計画は、長期ビジョンEpson 25実現のための基盤づくりの3年間との位置づけであり、将来成長のための取り組みは手を緩めることなく、最優先で行っていく。また、通期業績の達成も重要であり、環境の変化にも適切な対応を行うことで、成長の基盤づくりと予想の達成を同時に実現したい。

Q2: 第1四半期の為替変動による事業利益影響は68億円のマイナスだったが、第2四半期以降も同程度の為替水準で推移するとしたら、為替変動によるマイナス影響も第1四半期と同程度発生するという事なのか。

A2: スライド3で示している通り、為替変動影響は、USD、EUR以外の通貨で61億円のマイナス影響があった。その他通貨は、昨年度の第2四半期以降急激に下落したことから、第1四半期の前年同期との比較では、為替の変動幅が大きく出ている。第2四半期以降も現在と同程度の為替水準で推移する場合は、前年同期との為替差は徐々に縮小していくため、第1四半期ほどのマイナス影響は発生しない。

エプソンの業績予想の前提となる為替レートは、期初段階から保守的に設定していることから、現在の為替水準は、期初予想の前提と同水準であり、為替影響は年間で230億円程度のマイナス影響であるという考え方から変更は無い。

Q3: インクジェットプリンターの市場環境や、エプソンの販売状況を教えて欲しい。

A3: エマージング地域を中心に販売している大容量インクタンクモデルは、競合他社も同様な商品を投入したが、その影響は限定的であり、エプソンの販売は拡大が継続している。経済活動が停滞していた中南米での販売は、第1四半期には拡大基調に回復した。

先進国では、日本は市場停滞の影響を受け、エプソンの販売台数も減少した。欧米市場では、価格低下の進行が緩やかとなる中、市場全体の販売台数は微減であったが、エプソンはオフィス向けを中心に販売台数を拡大させることができた。

インクの販売も、先進国を中心に堅調な推移が継続している。

Q4: ビジュアルコミュニケーションの第1四半期での事業利益は前年同期比減益であった一方で、通期事業利益予想は前年度並みであるが、第2四半期以降の前提を教えて欲しい。

A4: ビジュアルコミュニケーションの大部分を占めるプロジェクターの販売は、6月度には過去最高の月度販売台数を更新するなど、市場でのプレゼンスはさらに向上した。

第1四半期は普及価格帯の販売比率が高かったことに加え、戦略的費用投入や為替の影響も受けたことで減益となったが、第2四半期以降には、戦略商品であるレーザー光源を搭載した高光束プロジェクターなどの高付加価値商品も市場投入されるため、これらが収益性の改善をけん引していく。

以上